

特定非営利活動法人ハッピーロードネット（福島県広野町）

30年後の故郷に贈る

特定非営利活動法人
ハッピーロードネット

理事長

西本 由美子



1. 広野町の概要

広野町は、福島県の浜通り地方に位置し、東に太平洋、西に阿武隈山系を臨み、春の新緑、秋の紅葉など四季折々に美しく彩る自然豊かな町です。童謡「とんぼのめがね」が生まれ、唱歌「汽車」の舞台であるといわれており、温暖で寒暖の差が少ない気候から「東北に春を告げるまち」をキャッチフレーズに掲げ、みかんが栽培できる北限の地としてみかんを特産品とした商品開発を進めています。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災に起因する福島第一原子力発電所の事故により、町全体が緊急時避難準備区域に指定され、全町避難を余儀なくされました。区域解除後、帰還が進み、9月末現在では4,147人が町内に居住しており、帰還率は約86.6%となっています。

東日本大震災・原子力災害から7年半を迎え、町は広野駅東側地区を復興拠点とし、災害公営住宅やテナントオフィス、ホテルや病院など住環境整備を進めており、来年4月には町立の認定こども園の開園や県立ふたば未来学園中学校の開校など教育環境整備にも力を入れています。

町内では日本初のサッカー専用ナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」の再オープンなど復興の追い風となる話題が続いています。

広野町は双葉地方の復興のフロントランナーとして、復興に向け一歩ずつ着実に歩みを進めています。



防災拠点 広野町駅東地区

2. 活動開始の背景・経緯

当団体は、ももとは、福島県広

野町の「交通安全母の会」を母体とし、子どもの通学路にガードパイプ設置の要望をしたことから始まりました。地域に住む子どもたちの意見を聞くために相双地区の中学校・高校にアンケート調査を実施したところ、子どもたちからの地域に対する貴重な意見が出され、その要望を実現するために、様々な活動を展開してきました。

市民誰もが、真剣に、責任を持ち、継続的に、更に楽しいまちづくりに参加し、その成果として楽しく住みやすい地域社会を実現することを目指し、平成20年に「特定非営利活動法人ハッピーロードネット」を設立しました。

3. 主な活動内容

現在、ハッピーロードネットは主な活動として以下の4つの活動を行っています。

(1) ハイスクールサミット

人材育成を目的に、相双地域の未来のまち・未来のみちについて、中学・高校生たちが一緒に考えるフォーラムを平成18年から開始し、毎年継続してきました。はじめは相双地域だけではじまったものが、全国そして世界へと規模を拡大し、平成29年までで14回開催しました。



パネルディスカッションや高校生の発表・ワークショップの様子

(2) 国道6号ボランティア清掃(みんなでやっぺ!!きれいな6国) 福島県浜通り地方をより活き活き

とした町とするため、将来を担う高校生たちに道づくり・まちづくりに参画してもらう活動を実施しておりますが、その一つとして、高校生たちの発案で「身近なボランティア活動として道路のゴミ拾いをみんなで一斉にやってみよう」という熱い想いを実現するため、「みんなでやっぺ!!きれいな6国」実行委員会を立ち上げ、清掃ボランティア活動を平成19年より実施しています。東日本大震災により一時中断しましたが、平成27年に再開し、毎年継続して実施しています。企画・運営・進行を地元の高校生が執り行っております。



国道6号ボランティア清掃

(3) ふくしま浜街道・桜プロジェクト

いわき市から新地町まで浜通り地方を縦断する国道6号に約2万本の桜を植えるという壮大な計画です。地域住民をはじめとするボランティアが桜を植樹し桜並木でつないでいくことで、東日本大震災及び原発事故により離ればなれになっている地域の人々、さらには地域と世界をつなぎ、将来的には咲き誇った桜並木を震災からの復興のシンボルとして全国そして世界へ発信し、後の世代に残していくため、平成25年より桜の植樹を開始し、毎年継続的に実施しています。現在約9,000本を越える桜を植樹しました。将来は成長した桜の木が震災の語り部となってくれることを期待しています。



広野町の防災緑地に桜を植樹



中学生と一緒に桜植樹

(4) ベラルーシ友好訪問団

1986年に起きたチェルノブイリ原発事故によって放射能汚染の被害を受けたベラルーシの地域の現状を調査するために、福島県浜通りの高校生たちを中心とする日本とベラルーシの友好訪問団を結成して、現地を訪問し、交流を通じて放射線の現状を調査する活動を行っております。この活動は平成28年から開始し、今年で3回実施しております。

その報告会を10月に広野・檜葉両町のJヴィレッジで開催し、高校生が訪問の成果を発表しました。原発事故の風化が進む中、訪問の経験を踏まえて記憶を継承していくためのアイデアや復興に必要なリーダーシップについて発信しました。

これらの活動を通じて、30年後を見据え、浜通りの復興を担うリーダーを育成するため、引き続き子どもたちに学びの場を提供したいと思っております。



国立ゴメリ大学生物学部長の講義



国立子ども保養施設
「プラレスカ」の子ども達との交流

4. 活動の広がり

ハイスchoolサミットでは、高校生を対象にフォーラムを開催してきましたが、サミットに参加した高校生が大学生となり、ファシリテーターとしてこのサミットの企画・運営に携わっています。子どもたちの地域づくりに対する思いが代々受け継がれていき活動の広がりを見せています。

また、国道6号清掃は、いわき市から新地町までの各市町村において実施し、地元高校生を中心に青年会議所や地元企業にも多数参加していただき、年々活動の輪が広がりをみせ、国道6号だけでなく、近くの県道や市道の清掃も行っています。

桜の植樹又は維持管理については、地元高校生や中学生及び、全国の皆さんのボランティア協力を頂いており、年間700人以上の人達が参加し年々活動の輪が広がってきています。

5. 原発事故からの復興

原発事故から7年半が過ぎましたが、今だ復興道半ばの浜通り地方の現状を知ってもらうことが風化させないためにも重要であり、さまざまな交流活動を実施しています。

高校生が大人になり自分の子どもたちに震災の様子を説明できるよう人材育成として、ベラルーシとの交流・学習活動もその一つです。

もっと高校の授業の中で放射線教育を充実させてもらう為に県内の高校教諭による大震災・原発事故の被災地視察を実施しています。

桜植樹により30年後、桜並木として地域の情報発信をすると共に観光資源になりそれを通して雇用が生まれたならとても素晴らしいことだと思います。

6. これまでの成果

ボランティア清掃や桜プロジェクトの毎年継続した活動により、ボランティアの数が年々増加してきています。

地域と行政の橋渡し役として、地域が今必要としていることを行政に働きかけ、行政と地域が一体となった活動が着実に地域に浸透してきています。

また、サミットから生まれた高校生たちの夢が現実形となってきており、更に新たな高校生が街づくりに参加しています。常磐道ならばPAの企画設計、その中でサッカー選手の足形のレリーフの設置や、相双地区の四季折々の絵の展示などが実現されました。また、桜プロジェクトも高校生の発案により始まりました。

サミットを長年継続してきたことで、高校生だった子が成長し大学生・社会人となり、地域のために働いてくれています。

7. 課題と展望

ふくしま浜街道・桜プロジェクトにおいては、草刈り等、桜の維持管理について苦労しています。道路の沿線に約12m間隔で植えており、点在するため、草刈り等をするにしてもとても手間がかかり大変苦労しています。資金面においても、ボランティアで草刈りをしていますが、ボランティアだけではやりきれないため、クラウドファンディングを通じて資金を集めたりもしています。持続継続的に桜の維持管理をしていくことについて模索しております。

私たちの願いは、30年後の未来に子どもたちが福島県浜通りへ戻ってこられるようにふるさとを再生していくことです。また、全国のみなさんに浜通り地方に来て頂いて福島の復興の様子を肌で感じていただきたいです。



国道6号の桜開花状況